

ドラゴンと虎

てらもっち7等兵

ドラゴンと虎

ある森に小さめのドラゴンが暮らしていました。

ドラゴンは臆病だったので、森から外にはあまり出ませんでした。

ある朝、虎が森にやってきました。

大きな虎は、のしのしと我が物顔で森の中を歩いていきます。

ドラゴンはその姿をそっと木陰から眺めていました。

小さめですが大きなドラゴンは本当に臆病だったのです。

夜になりました。

小さめのドラゴンはいつも通り、森の中の高台に厚く厚く何重にも草を敷いて眠りにつこうとしました。

突然、虎が現れました。

「おい、お前。その心地良さそうな場所で俺も寝かせてくれないか。」

「は、はい。もちろんいいですよ。でも、私の事を襲わないでくださいね。」

小さめのドラゴンは後ずさりをしながら言いました。

「なに言っているんだ。お前のほうが身体も大きいし空も飛べるじゃないか。」

「で、でも、僕は臆病なんです。」

「はははは。面白いやつだなあ。」

2人は夜遅くまで語り合いました。

ドラゴンは森の中の美味しい木の実がなっている木や美しい泉の場所を教え、虎は森の外の話や人間という不思議な動物について語りました。

2人ともお互いの事や自分の知らない事がよく分かって、新しい友人ができたような気がして嬉しかったのです。

それから一ヶ月が過ぎました。

二人は一緒に兎や魚を捕ったり、花を眺めたりしました。ドラゴンは一人で考えていた事、**虎**はこれまで採ってきた美しい鹿や、美味しかった水牛の話をしていました。2人は親友になっていました。

ある日、数人の人間の男達が森に入ってきました。彼らは罠をかけ**虎**をとらえました。檻に入れられた**虎**は荷車に積まれて森を出て行きました。ドラゴンは高台から悲しい目でそれを見ていました。

寂しく孤独な時間が流れていきます。

ドラゴンは思いました。

「人間が悪い種族なのか。そうかもしれない。でも、今の事態はそれが原因じゃない。僕が**ドラゴン**らしくなかったから、僕が意思を持たなかったからこんな事態になったんだ。」

「このまま、こんな時間が流れる未来は変えなくちゃならない。僕は**ドラゴン**にならなくちゃいけない。」

ドラゴンは森を出ました。翼を広げ空を飛び街に向かいました。

口から**火**を吹き、剣を持ち向かって来る騎士達を牙を剥いた口で啣え、怒り狂った形相で人々を追い回しました。大砲や弓矢で傷をおい、**血**だらけになりながら、塔にしがみつき吠え、ぎらぎら光る目で**虎**を探し求めました。

「いた。」

虎は動物園の檻の中にいました。

ドラゴンは動物園に降り立ち、その鋭い歯と牙で檻を壊し**虎**を助け出しました。背中に**虎**を乗せ**ドラゴン**は森へ飛んで帰ります。

ツルツルした美しく七色に光る鱗に必死にしがみつきのながら虎は呟きました。

「君は、本当の強さを知っているんだね。そして使った。」

ドラゴンは答えました。

「僕に力は無いよ。意思を持つ事ができただけさ。

少しでも未来をいいほうに変えたい。その気持ちだけだよ。」

二人は森に帰り、以前と同じように暮らしました。

夜はふかふかの草のベッドで眠り、昼はお花畑を散歩し、必要な分だけ動物達を捕え食べました。時々、やってくる騎士には、交替したり協力して二度と来なくなるように驚かしました。

二人は幸せでした。ドラゴンは相変わらず臆病でしたが、自分の意志で生きている事を実感していました。

そんなドラゴンと虎のお話でした。